住みよいたけし

住みよい武石をつくる会広報
第46号
2024年12月16日発行
事務所　武石地域総合センター内
TEL:0268-85-2511
https://www.s-takeshi.jp
印　刷　中澤印刷株式会社

ともしび茶会 野点

茶室にて　お道具拝見

ともしび博物館 秋のイベント

11月２日(土)ともしび博物館ではともしび茶会が開かれました。

季節外れの大雨とあいにくの天気でしたが、展示館の軒先ではやまぶきの会(山崎恵美子会長、指導は小山由紀子先生)の皆さんによる野点(のだて)が行われ、三々五々訪れた皆さんは紅葉に染まった庭園を眺めながらお茶を楽しみました。

茶室では和の会(山本正信先生)による茶席が開かれ１回に6～7名、５回で20余名の皆さんがお点前(てまえ)をいただいていました。

また11月６日(水)から17日(日)にかけて「秋・冬の繭灯り展」が開催されました。特に9日(土)・10日(日)は「武石保育園児作品展」「繭ランプシェード作り」「夜の夢灯りイベント」も開催され２日間で約300人の入館者と賑やかなイベントとなりました。

夜の夢灯りイベント

にぎわい広場オープンに合わせそばの提供

10月12日(土)武石地域総合センターの駐車場とにぎわい広場のオープン記念式典が開催され、引き続いて武石交流秋まつりがにぎやかに行われました。

つくる会産業経済部会では、新たなにぎわいの場の完成を祝し、ＪＡひだまり武石店舗において6名の武石ソバ活性化組合の皆さんの協力を得てひすいそばを提供しました。100食限定でしたがこれを目当てに来られた皆さんで1時間ほどで完売となりました。

ＪＡひだまりたけしで食品営業許可取得

食堂、食品販売のお試し利用ができます

つくる会では、これまで空き店舗となっていたJA武石店(ひだまりたけし)で食品営業許可を取得しました。

ひだまりたけしは、ＪＡ信州うえだの食料品店舗が閉鎖された後、武石ソバ活性化組合のそば打ち道場などで月数回利用されていましたが、武石地域の中心部ということで、何とか活用できないかつくる会でも検討してきました。今回ＪＡやソバ活性化組合などのご協力により、食品営業の許可を取得しました。これによりここで製造した食品を製品としてその場で販売することができます。

つくる会でイベント時の調理場として直接利用するほか、貸店舗のような形で、これから食堂やカフェを開業したい方などが「お試し」で営業してみる場所などとして利用することができます。

利用を希望する方はつくる会事務所(0268-85-2511)までご相談ください。

おさんぽギャラリー秋 武石文化祭

11月2日(土)、3日(日)の「ともしびの里文化祭」に合わせ、武石風土つなぎ隊が主催する「おさんぽギャラリー秋」が開催されました。

台風から変わった低気圧の影響で晩秋には珍しい大雨とあいにくの天気になってしまいましたが、つなぐ家やたまり家周辺で様々な催しが行われました。

たまり家では武石小学校４年和組31人の児童が「まつ武ちゃんみそ」を販売しました。児童たちは自分たちが栽培した大豆を使って３年生のとき味噌作りを体験していますが、今回は販売許可の関係で大豆は自分たちが栽培したもの、米麹は６年生が栽培した米を提供してもらい、仕込みは生活改善グループにお願いし、ラベル作りを自分たちが行いました。

子どもたちは大きな声で客を呼び込み、たまり家の軒先はにぎやかな高い声が響いていました。

お知らせ　持続可能な武石の暮らしを考える会

長野大学松下ゼミ　活動報告&意見交換会

参加者募集

2024年度に長野大学松下ゼミが地域の皆さんとともに実施した「巣栗渓谷エコツアー」、「古民家『たまり家』再生による子どもの居場所づくり」、「ピザ窯小屋『ぴざらぼ』運営によるコミュニティ拠点づくり」について報告し、住みよい武石づくりをテーマに参加者との意見交換会を実施いたします。

- ●主　催　長野大学環境ツーリズム学部松下ゼミ
- ●日　時　令和7年1月25日(土)　10時～12時
- ●会　　場　武石地域総合センター3階大会議室
- ●問い合わせ　E-mail:matsushita@nagano.ac.jp

地域のつながりづくりを考える
地域支え合いづくり懇談会＆武石地区住民会議

10月11日（金）地域支え合いづくり懇談会が上小寺尾自治会で開催されました。この懇談会は、市社会福祉協議会が各自治会単位に開いているもので、武石地域では、上小寺尾で7会場目となります。

上小寺尾は世帯数30戸、人口は60人ほどで人口減少が続き、高齢者の単身・二人世帯も増えています。しかし近年移住する人もいて空き家はほぼ0の状態です。この日は午後7時から地区の公民館に住民12名が集まりました。

懇談では2019年の台風19号災害で地域が孤立したときのときのことや、民生委員による住民アンケート結果などをもとに、2班に分かれてこれからの住民同士の支え合いについて意見を出し合いました。現在は何とか生活ができているが、将来高齢化するとともに自分の生活も、地域の支え合う力も減少するものと思われ不安だとする意見も出され、そうした中でどのように地域住民の生活を支え合っていくのか意見交換しました。

また、11月23日（土）には武石地域総合センターホールで「共に生きる武石のつながりづくり」をテーマに、武石地区社協が主催する武石地区住民会議が開催されました。50人ほどが参加し、県長寿社会開発センター下村亮一氏からの問題提起を受けて9の班に分かれて「無くなってきた地域伝承の行事、花壇づくりなどの地域の取り組み、20年後まで残したいもの」についてワークショップ形式で話し合いがもたれました。

地域支え合いづくり懇談会も武石住民会議も、それぞれ失われつつある地域のつながりを守る大切さについて住民が改めて考える機会となりました。

武石診療所奥泉院長との懇談会　健康福祉体育部会

11月7日（木）つくる会健康福祉体育部会では武石診療所奥泉所長にお話を聞く会を開催し20名が参加しました。部会では、利用向上・経営改善や地域としてお手伝いできることはないかを探り、今後とも地域の診療所を守っていきたいとして懇談会を開催し今年で3回目となります。

奥泉院長は、矢嶋・寺島・廣瀬と代々の院長が行ってきた地域医療の継続を目指しながらも、医療従事者の負担軽減や人口減少などに対応する医療体制の改革も進める必要から、依田窪病院からの医師派遣・カルテの共有、看護師宅直制度の廃止などの経過を説明しました。日ごとに診療する医師が替わることへの住民の不安については、電子カルテにより医師間や依田窪病院とも疾患や家族の状況などのデータが共有されるので、時間的ロスや薬の重複などのミスが防げると話されました。今年は在宅高齢者を支えるうえで大切な包括支援センターや依田窪福祉会との定期的な意見交換を充実させてきており、今後は特に在宅での看取りにつながる訪問診療（往診）を増やしていきたいとしています。

また、「人生会議（アドバンス・ケア・プラニング）」について話されました。人生会議という名称は厚生労働省が命名したものですが、要は自分の人生の最後の段階をどう迎えるのか（どんな医療やケアを受けるのか）について自分の意志をはっきり表明し、家族など周りの人や医療従事者と話し合い理解を得ておくことです。望まない延命治療が行われることもありがちな現代において、こうした話し合いの大切さへの認識を新たにするお話をいただきました。

空き家に関する座談会
11月9日(土)

空き家の活用は所有者はもとより地域にとっても課題となっています。市によると上田市の空き家は最近の調査で3,388棟あり、今後は所有者の意向調査も行って有効な活用法を考えていくとしています。

現在、武石地域では市の空き家バンクに8件の登録があるとのことですが、市では武石地域で空き家となっている2件について、「田舎暮らしの本11月号」に情報を載せたところかなりの問い合わせがあり、活用希望者の見学会（古民家活用イベント）を12月15日に計画しているので、事前に地域住民の意見も聞きたいとしてこの座談会となりました。

12月のイベントでは応募した人達が実際の家屋や周りの状況などの現地を見学し、来年3月ごろに応募者の提出するプランの説明会を行い、所有者の意向で利用者を決定していきたいとしています。

家族に喜んでもらいたいな!
～じゃがいも料理レシピを作成～

七ヶの池田芽生（めい）さん（武石小学校３年生）は、つくる会産業経済部会が今年行った「親子の農業体験」のジャガイモ掘りに参加し、27個もジャガイモがとれたことから家族に喜んで食べてもらおうと、収穫したジャガイモを使ったじゃがいもピザ、にくじゃが、ポテトサラダなど５品目のレシピ「わたしのじゃがいもりょうり」を作成しました。

用意する材料と分量、作り方の手順、出来上がりの写真そして料理の感想も載っていてとても美味しそうです。

実際にレシピを見て作った人からは、「レシピ通りやったらとても美味しかった。」と感想が寄せられました。

レシピは、住みよい武石をつくる会事務局の掲示板に掲示してありますのでご覧ください。

武石八景看板設置　鳥屋の炊煙（すいえん）

つくる会自然生活環境部会では、江戸時代の上田藩郡奉行（こおりぶぎょう）相馬与右衛門通孝が武石の風景が詠んだとされる和歌に関連する地区に案内看板を設置してきています。

11月には沖の小山北側の県道脇休憩所に「鳥屋の炊煙」の案内板を設置しました。

昨年設置した武石十景「小山秋月」案内板の横ですのであわせてお楽しみください。

難波津（なにわつ）の昔をかけて偲（しの）ぶかな
民の竈（かまど）に煙たつころ

難波の高津宮に都を移した仁徳天皇が、民の家から炊事の煙も出ないほどに困窮していることを知り、三年間税を免除して民の生活を立て直したという古代の出来事が偲ばれることだなあ。家々から炊事の煙が立ち上る鳥屋の集落が暮れなずむころは。

第28回 たけし歴史さんぽ道

70年余の上武石文庫図書館Ⅰ

郷土史家 児玉卓文

上武石自治会は、９月８日の日曜日、永らく地域の防災拠点となっていた「旧消防庫・消防団詰所」、及び「火の見櫓」のお別れ式を行い、翌９日から両施設を解体しました。

この「旧消防庫・消防団詰所」は、板壁に収蔵した籾を取り出す「落とし」の痕跡があるので、郷蔵を改装して転用したものであることが分かります。

モミを取り出すための落とし

郷蔵は江戸時代、年貢米を保管、または凶作に備えて穀物を蓄えるために設けた倉庫で、村の中心的な場所に建てられました。宝永３年（1706）の『武石村差出帳』を見ると、小路（10間×３間）、堀之内（９間×３間）、鳥屋（６間×３間）、小沢根（４間×３間）の４か所に茅葺きの郷蔵あり、小路・堀之内は免税地、鳥屋・小沢根の敷地には年貢が課せられています。

明治以降、郷蔵は貯穀庫として存続したり、小学校や集会所、あるいは糀室などに転用されましたが、現在上田小県地域で郷蔵あるいは郷蔵と思われる建物で残存しているのは十数棟です。大部分が土壁で、江戸後期の設計見積もり古文書などをみても、土壁・瓦葺が多いように思われます。

武石では、鳥屋と権現に現存していますが、双方とも上武石と同様の板壁です。もっとも鳥屋の郷蔵は、公民館を新設する時、外側の壁を取って穀櫃部分だけを現在地に移築したようで、権現のものは明治末期に再建されたもののようで、後、消防庫に転用されています。

権現の郷蔵は、武石村最初の小学校「上本入村下本入村組合麗正学校」になりましたから、現存のものより大きかったと思われます。余里の郷蔵はその支校として使われました。この学校は、明治15年、「小県郡第33学区本入学校」として独立し、権現原の官有地（旧入会地）の払い下げを願い、旧権現保育園の地に、武石村で初めて独立した校舎が建設されました。

権現の再建郷蔵、消防庫で使用

さて、江戸中期の堀之内の９間×３間という大きな郷蔵は、現在の堀之内集会所のところに、阿弥陀堂と並んでありました。

解体された上武石の消防庫は、間口４間・奥行２間の郷蔵の東２間分に床を張って詰所とし、西２間を切って１間半の器具庫に改造したものでした。

９月７日、解体直前の旧上武石区消防団器具庫・詰所

『ふるさとへの伝言』（武石村教育委員会　昭和58）に、市ノ瀬の児玉寿雄さんが描いた大正初期の小学校周辺の絵図があります（84ページ）。堀之内から市ノ瀬にかけては段丘縁りに古い道があり、現在の道との間に、西から「火の見櫓・上武石消防器具庫（現同）・攻玉館（上武石集会所）」の建物が描かれています。

宝永の郷蔵は老朽化のため、江戸期の何時か規模を縮めて再建され、「（現同）」の注記があるので、大正初期までに絵図の場所に移転して消防庫・詰所に改造され、さらに道の反対側に移されたと思われます。

江戸期の上武石の人々は、十二宮の間口５間・奥行３間の拝殿を寄り合い（集会）の場所としていましたが、十二宮は明治42年に子檀嶺神社に合祀され、本殿・拝殿を取り壊したので、現公民館の場所に集会所を建設して攻玉館と名付けました。「攻玉」とは、「玉をみがく、転じて知識をみがく」ことを意味します。集会所にすごい名前を付けたものです。明治の進取の精神の現れでしょうか。明治30年に松本に通ずる道の郡道編入を申請しているので、新道はそれ以後、三施設は明治末～大正初めの建設・移転と思われます。

武石で働く事業所の紹介

武石の企業訪問

株式会社 メクトロン

専務取締役　橋詰 和夫さん

下武石の市道沿いに「メクトロン」の大きな看板が乗った事業所があります。敷地内には設立当初に植えられた桜の木が今も30本程あり、春には満開の桜が近くを通る人達を楽しませています。

現在、メクトロンでは下武石の事業所（本社および工場）の他に、国内に6か所の事務所・営業所と海外に2か所の拠点を置いています。

従業員数は約150名（営業部20名、生産部90名、技術・開発部25名、管理部15名）で、下武石の事業所には武石地域の方が10数名いるそうです。

1958年（昭和33）、（株）宮野鉄工所からライターヤスリおよび工業ヤスリ部門を独立し「株式会社宮野製作所」を設立、1963年（昭和38）旧武石村の工場誘致を受けて坂城町から下武石に工場を移転、ライター用発火ヤスリの製造を開始しました。その後、工場の拡張や自動化の推進などにより1971年（昭和46）には月産350万個を達成、世界でもトップレベルのライターヤスリ専門会社となりました。

ライターヤスリ全盛時の工場全景

しかし、円の急騰やオイルショックなどによりライター市況が悪化、ライターヤスリの受注が減少したため、1986年（昭和61）工作機械組立工場を建設、工作機械の製造・販売へと事業転換をはかっています。1989年（平成元）には、社名を（株）宮野製作所から「株式会社メクトロン」に変更しました。

現在の事業内容は、工作機械や周辺機械の製造・販売が90％、その他、金属製品の加工および製造・販売が10％となっており、ライターヤスリの製造からは完全に撤退しています。

主要生産品の工作機械や周辺機械は10数種類あり、月産約15台、主に国内の自動車部品加工メーカーに納入されています。

メクトロンには「必要なものは自分たちで作る」という精神の下、ライターヤスリの生産合理化で培ってきた精密加工のノウハウや自動化の技術があります。

工作機械や周辺機械を含めた生産システム全体を、メクトロンの開発・設計・製造の一貫体制で支援できることがメクトロンの強みであり、製品の強みでもあります。

工作機械の組立（マシニングセンタMTV-T471型）

橋詰専務が日頃大切にしていることは、「社員が長く働ける職場環境を作ることで、風通しの良い職場作りをしていきたい」と話していました。

本社事務棟の前に石碑が建っています。

書かれている句は、創業社長の宮野利盛氏が、昭和38年武石工場第1棟建設に当たり詠んだもので、「将来の遠大な希望を託して詠んだ句」とのことです。

「武石野に 麦一粒の 地鎮祭」
利盛詠

株式会社 メクトロン

住所：上田市下武石1240
電話：0268-85-2345(代)
ホームページ：http://mectron-inc.com